

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02803

研究課題名(和文)小学生の英語運用能力向上のための教育プログラム構築への研究

研究課題名(英文) Research toward Establishing a Comprehensive Educational Program in order to Enhance Japanese Elementary School Children's English Proficiency

研究代表者

米田 佐紀子(YONEDA, Sakiko)

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：70208768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：毎週1時間～3時間の授業数の確保、1年生から英語専科とALTによる4技能指導、音声教材付きの絵本音読の毎日の課題と保護者への確認の協力、日本人児童がオーストラリアの姉妹校児童とスカイプおよび対面で交流することを有機的にカリキュラムに取り込むことで、動機づけや学力・音声・態度などの面で効果をあげたことが、ビデオの観察やケンブリッジ英検テストの結果で示された。ここから、(1)時間数確保(2)4技能指導(3)専科とALTによるTT(4)課外の音読課題(5)日豪児童同士によるスカイプと対面の交流、という様々な要素を有機的に統合したプログラムが学力向上につながるという示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：The test results (Cambridge Young Learners English Test) and video observation indicated that a comprehensive program enhanced Japanese children's English proficiency at a private elementary school. This program integrated the following elements: (1) more class hours than public schools, i.e. 1-3 hours a week from grade 1 to 6, (2) four-skills-based curriculum, (3) team-teaching by a certified Japanese teacher and an assistant language teacher in all the classes, (4) reading-aloud assignment using Oxford Reading Tree with audio material, and the children's parents were expected to monitor their children's work five times a week, and (5) exchanges with Australian peers via Skype and in person on a regular basis. The main feature of this research project was an attempt to integrate the elements above in a single program. This school's educational program could be a role model in the near future in Japanese elementary schools.

研究分野：言語学、外国語教育(小学校英語)

キーワード：小学校英語 包括的英語教育プログラム 4技能の統合 話すこと[やり取り] CEFR スカイプ(web会議)  
国際的評価 英語運用能力

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 英語力の向上を目指して導入された「外国語活動」が必修化されて4年目を迎えていたが、定着をねらいとしていなかったため、客観的な成果によって示されたものは大変少なかった。

(2) 米田他(科研費 基盤研究(C) 課題番号 23520765)は国公立の小学校への調査をケンブリッジ児童英検(以下「YLE」)を用いて実施した。その結果、慣れ親しむことがねらいの「外国語活動」であっても、リスニングテストでCEFR Pre-A1の75%~80%の正答率に達する力をつけたことをつかった。同時に教科としての英語を4技能で習っている小学校では91%の正答率となり、CEFR A1の力がある可能性があることが分かった。

(3) 教科としての英語指導している小学校ではYLEの公式テストでPre-A1に達することが確認でき、世界と比較した時、日本人平均よりは高いが、他国よりは得点が低いことや当該レベルに到達する年齢は高いことが確認できた。

(4) 動機づけについては、国際交流を行っている私立・公立小学校で動機づけ得点が高いことがつかめ、実体験をカリキュラムに取り入れることが動機維持につながるが示された。

(5) 日本人の英語力向上がますます求められる中、先行研究(米田・西村、2014)において得られた、国際交流が動機づけに効果があるという点に着目し、Web会議での海外との交流を有機的に教科学習と関連付けることで、小学生にとって英語に触れる機会が増え、ひいては英語運用力向上につながるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 「教科としての英語」の先進的な取り組み(CEFRを中心とした4技能の指導や国際交流)をしている小学校において、Web会議を取り入れることで、児童の動機づけ・学力(英語運用力向上)に繋がるか質的・量的両側面から検証し、包括的教育プログラムの構築を目指すことを目的とする。

(2) Web会議による児童の学力と動機づけ、英語コミュニケーション能力向上への効果を検証する。そのために量的・質的方法によるデータ収集および分析による結果を用いる。質的・量的データの分析結果を統合した考察から、Web会議の効果と課題を検証し教育プログラムの提案を目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 参加者

国際交流を行っている地方の私立小学校 4

~6年生と公立中学生(小学5年次~中学3年次まで)である。いずれの学校も少人数(私立小学校は15~20名程度、公立中学校は30~40名程度)であった。本研究では縦断的に追跡調査することがねらいであったため、データに欠損があってもその参加者をデータから削除せず、クラス単位で分析を行うこととした。

協力校のカリキュラムおよび英語学習時間であるが、私立小学校では1年生から英語を実施している。1,2年生は年間35時間、3,4年生は70時間、5,6年生は前期週2時間、後期3時間で年間87.5時間、6年間で合計385時間、教科としての英語を学ぶ。これに対し、公立学校では5,6年生で「外国語活動」を35時間、中学校で年間140時間、5年間で通算490時間を学ぶ。公立の参加者は小学校の1学年がそのまま同じ中学校に進学するという珍しいケースだったため、長期的な追跡調査が可能となった。一方で、私立小学校では進学先が多岐にわたることから継続調査が難しく小学校のみの調査となった。

私立小学校はスカイプ交流と対面交流を実施したが、公立小中学校では対面交流のみ実施した。またケンブリッジ英検の公式テストは私立小学校のみが受験した。

(2) 研究方法

以下のとおり、量的および質的調査を行った。

学力調査(量的調査)

YLEの模擬試験(4技能)と公式テスト(学力調査)を用いて、学力の変化を追った。私立小学校と公立中学校は模試で4技能、公立小学校はリスニングテストのみ実施した。

動機づけ調査(量的調査・質的調査)

米田・西村(2014)で用いた質問紙を用い、英語学習に関する情意変化と国際的志向性について追跡調査を行った。

Web会議の効果に関する調査

様々なWeb会議の方法を検討したが、使いやすさ等からスカイプを用いることとした。実施は火曜日の11時前後で1回につき、30分程度に収まるように実施した。実施回数であるが、全学年で2015年度12回、2016年度17回、2017年度12回実施した。全学年が1年間に2~3回ずつ行った計算になる。日本とオーストラリアの時差は1時間ということでは長所であったが、実際に始めてみると、学校行事や長期休暇の関係で両校のスケジュールのすり合わせが難しいことが分かった。

スカイプ交流におけるパフォーマンス評価については、様々な先行研究を参考にして、児童への質問紙調査や担当教員に評価を行ってもらった。

パフォーマンス評価については、対面交流とスカイプ、オーストラリア人児童が訪日した際と日本人児童が訪豪した際の対面交流をビデオ撮影し、アイコンタクト量について、専用ソフトウェアを用いて調べた。また、聞き取り調査も行った。

#### 家庭との連携

教育には家庭との連携は欠かせない。2015・2016年度はポートフォリオによる学習内容の確認、2017年度は以下で述べるリーディングの確認をお願いした。

学習内容についての保護者の理解度やサポート量などを確認するため、質問紙調査を実施した。

#### 音声付きリーディング教材の取り組み

研究当初は含まれていなかったが、Oxford Reading Tree を取り入れた。これを取り入れた目的は以下の3点である。

- i) 英語の発音やリズムにより慣れ親しむ
- ii) 毎週異なるテキストに接することでたくさんの語彙に触れ、豊かな語彙力を身につける
- iii) 英語で物語を読んで楽しむ

用いたテキストは、イギリスの約80%の小学校で「国語」の教科書として使用されているOxford Reading Tree (ORT)のLevel 1からLevel 5である。内容的には生物、宇宙、伝記、歴史、地理、美術など多様なノンフィクションもあり、CLILの教材となっている。毎週、2年生がLevel 1と1+、3~4年生がLevels 2 & 3、5~6年生がLevels 4 & 5から持ち帰る本を1冊選び、自宅でオーディオファイルにアクセスして(あるいはCDで)、一週間に最低5回は聞くこととした。2年生はlistening、3~4年生はreading out (repeating)、5年生はreading out、6年生は加えてwritingも、というように、活動を段階的に設定した。保護者には、音読カードへのサインを依頼した。この宿題の主眼は、聞こえた通りに音やリズムをまねることにあり、音読の際にも、モデルと同じリズム、イントネーション、音となるよう子どもへの声かけをお願いした。高学年では、授業の中でTALKING SHEET about the book (10の質問文と答えのパターンが書かれている<例>What is your book about? —It is about \_\_.)を用いて、ペアで出来るだけたくさん質問し合う時間も設けることとした。

2016年度までは教科書付属のCDを持ち帰り所定の箇所を音読してくるという課題は出していたが、全学的に統一した取り組みにはなっていなかったことや、読み物教材を用いている点異なる。

#### ベトナムの小学校視察

示唆を得るため、小学校5年生でCEFR A1のMovers相当の力がつけられたというベトナムのホーチミン市を訪れ、授業参観や聞き

取りを行った。視察した小学校の2年生では、YLEのStartersで15点満点中10点を取得すると特別コースに入ることができるシステムになっており、上中下の3コースに分けられ、上位クラスは週8時間、中位クラスは4時間、下位のクラスでも2時間授業が行われていた。教員は日本でいう中等教育の英語教員免許を持っており、小学校担任教員と連携をとりながら授業を行っていた。インタビューをした児童はHow long have you been studying English?などの質問にも10 years. など流暢に答え、授業でも動詞の活用などを英語で学習していた。

#### (3) 分析方法

英語力の分析には模試の得点を用いて、継続的な変化の検討を行った。Web会議および対面コミュニケーション時のパフォーマンスのうち特にアイコンタクトに着目し、アイコンタクトの回数の計測を行った。さらにそれらのパフォーマンスと英語力の関係の検討、そして児童と保護者に対し行ったアンケートの結果を踏まえ、英語運用能力向上のためのプログラムについての考察を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 学力の検証について

本研究3年目の6年生13名の平均点を最新のアジア諸国4国(UCLES, 2016)の平均点と比較した(図1)。

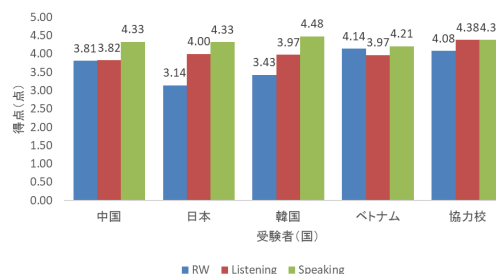


図1 YLE, Starters 公式テスト結果

その結果、4技能の合計得点は協力校が高く、4技能のバランスもとれていること示された。読み書きテスト(以下「RW」)の得点が2006年にデータを取り始めてから最も高くなり、ORTのreading outを取り入れた効果が出た可能性が示唆された。2017年度は、スカイプでの発話は自然な流れになったことがビデオで確認された。

受験者年齢が不明なため一概には言えないが、ホーチミンの5年生がCEFR A1レベルということ、本受験者のうち5年次で4割がA1の力に匹敵する得点だったことを考えると、日本人児童でも上位者は受験さえできれば、高い得点が取れ本来の実力を示せる可能性が考えられる。ホーチミンの例は、希望や学力によるクラス選択による成果を上げていることから、今後日本でもその方法を検討

しても良いのかもしれない。

一方、公立学校の方では模試を実施した。小学校では外国語活動だったので、リスニングのみ、中学校から RW を実施した。図 2 は CEFR A1 の Movers に換算して得点率を示したものである。外国語活動では CEFR Pre-A1 レベルのリスニング力を付けられることが示され、中 3 夏には RW で 7 割近い力がつくもののどれも A1 には届かなかったことが示された。ここから米田 (2011) の授業の焦点が学力に反映するという結果の裏書となった。同時に文部科学省が目指す学力に達しているとは言えないこと、世界的に見ると低いことがつかめた。

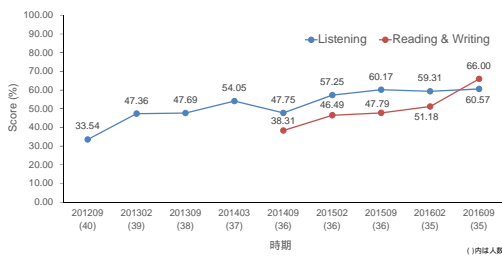


図 2 公立小中学校における学力の推移

## (2) 情意面について

研究期間 3 年間追跡した、私立小学校 6 年生クラスの英語学習に対する動機づけと英語コミュニケーションに対する懸念の推移を示したものが図 3 である。

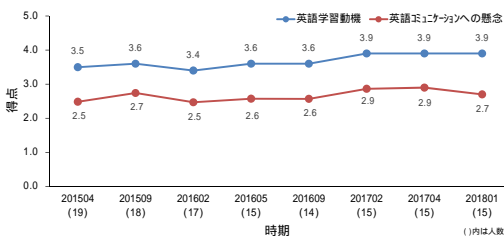


図 3 英語学習への動機づけと英語コミュニケーションに対する懸念の経年変化 (私立小学校)

図 3 で分かるように、動機づけは徐々に高くなったことが示された。学校で英語を勉強することの意義については、5 点中 3.8 点で「オーストラリアに行ったとき、実感したから。」と言った実体験を積むことが肯定的な意見に繋がったことが示された意見が見られた一方で、「ゲームをたまにしてるから。」「学校で習う英語だけでは、コミュニケーションをとることは難しいから。」「あまり使わない言葉だから。」という意見もあった。通じなかった、あるいは日常的に使わないという実感が否定的意見の背景にあることが確認できた。

本協力校ではすべての授業にネイティブの ALT が入り、1 年間に 2~3 回スカイプ交流、2 年に 1 度オーストラリア人児童が来日して交流、3 年に 1 度日本人児童がオーストラリアを訪問するという仕組みを作り、学んだ英

語を使用する機会に恵まれていると考えるが、質問紙結果から今後取り組むべき課題が浮かび上がった。

公立学校の英語学習への動機づけと英語コミュニケーションに対する懸念の経年変化を見ると、小学校 5 年生時点の高さを中学校 3 年生まで維持したことが示された。この学校ではブラジルとの交流を毎年対面で実施しており、学校で習う英語が使えると思う理由に「実際に、学校にブラジルの人きたときも少し英語でコミュニケーションをとったから。」「テレビなど見ていて、授業で習っていた英語などをつかっていたから。」という体験に基づくものやメディアを通じて抱くイメージを理由に肯定的な意見が散見した。

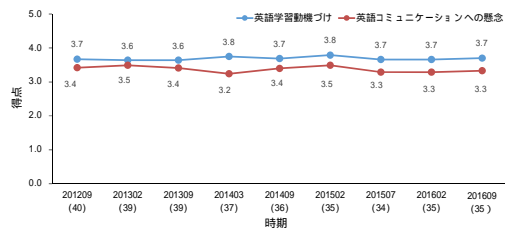


図 4 英語学習への動機づけと英語コミュニケーションに対する懸念の経年変化 (公立小中学校)

両協力校での調査結果から交流が動機づけに繋がっていることがつかめ、今後の指導への示唆が得られた。

## (3) Web 会議について

様々な Web 会議システムを検討した結果、スカイプを用いることにした。

スカイプ交流におけるやり取り能力について探索的検討を行った。調査方法は交流場面をビデオ撮影した後書き起こし、アイコンタクトの回数を専用ソフトウェアを用いて数えた。その結果から、アイコンタクトは日本語の交流だと回数が増える。テーマの難度が上がると回数が減る。スピーチ形式よりもクイズの方が、アイコンタクトの回数が増える。学力が高い児童の方が台本から目を離さず、アイコンタクトの回数が増えることが示された。また、観察からは、自分が話し終わったらカメラ前から立ち去るといった姿が見られ、コミュニケーションとは何かを教える重要性が浮かび上がった。

スカイプは会話におけるやり取り能力を育成する機会であり、児童に貴重な学びの機会を提供する。それを効果的に引き出すには、児童の英語力で扱いやすいテーマと言語表現、クイズなどの対話形式を選ぶことがやり取り能力の向上につながる可能性があることがつかめた。

対面で見られたやり取りはケンブリッジ英検の結果、つまり CEFR の Can-do とほぼ同じであったことは大変興味深い。このことは、国際的視点・基準で日本人児童の能力を知り、



今後の国際社会で通用する日本人の育成という視点で知見が得られたと言える。

参加者のうち 2017 年夏に豪姉妹校訪問した 6 年生 13 名にスカイプ交流の有益感について質問紙調査をしたところ、スカイプ交流が日本・オーストラリアでの対面交流に役立っていると感じている事が示された。理由として（対面交流で）通じたから、スカイプと対面での使用する場合や英語表現が同じなので有意義だと感じたから、知り合いになることで緊張がほぐれる、といった意見が見られ、対面交流に寄与しているという感覚がスカイプの有益感に繋がったことが示された。また、スカイプ交流では、決まった表現を何度も練習することが長所だと捉える児童がいる反面、対面交流では即興で英文を作らねばならず、そうした対応ができなかったのでスカイプ交流の意義があまり感じられないという否定的な意見もあり、今後注視すべき点として浮かび上がった。

観察およびオーストラリア人児童への聞き取りからは、スカイプの交流のほうが対面よりも良いと答えた児童が複数いた。その理由として、スカイプならば教員がそばにいたので助けてくれるが、対面交流では言葉が通じず、理解できないまま立ち往生してしまうとのことだった。確かにスカイプの録画からは、児童だけの発話では通じず、教員が間に入るあるいは同じセリフを言い直す場面が頻繁に生じたことが確認された。

CEFR Pre-A1 はやり取りにおいて、「簡単な定型表現や“chunk（意味の塊）”や基礎的な語句を使用して、自分の思いや欲求を相手に伝えたりすることや、言語の補助としてジェスチャーを使って、相手とコミュニケーションを図ることができる。」レベルであるが、相手が大人や言語能力的に上で意図をくみ取ってくれないと、やり取りとして成立させることは難しいことが今回の調査からつかめた。

この実践では以下の知見も得られた。まず、教員にパフォーマンス評価を依頼したが、スカイプがうまくつながらないなどの不具合が授業の進行を遅滞させてしまう、児童が混乱してしまったときには対応しなくてはならないなど、教員に課せられた複数の作業は負担が大きいと分かった。また、スカイプは繋がっても画質や音質の点で鮮明さに欠け、コミュニケーションの妨げになることも今後解決すべき点である。

#### （４）家庭との連携について

教育は学校・児童・家庭との連携が重要である。そこで、学校で英語に関して行っている事柄について、どのくらい知っているか、また評価している点は何で改善点は何かアンケートを 2016 年春に 6 学年全部の家庭を対象に実施した。回収率は全学年で 79.3%だった。

スカイプとネイティブの認知度は 5 段階評

価で、どのクラスも 4.7 以上だった。これは他の項目（例えば 4 技能指導をしていることや、英語専科が指導していることなど）よりも高く、ここから、ネイティブとの触れ合いに対する家庭の期待が確認された。具体的には「4 技能教育を基本に取り組みうとされている姿勢は素晴らしいと思う。スカイプを用いたり、姉妹校の生徒達が来校し交流する点は良いと思う。ポートフォリオの活用も良いと思う。」という意見がその良い例であろう。一方で、親がどのように関われば良いのかもっと具体的に説明してほしいという意見もあり、様々な取り組みの意義や内容、目的、特に家庭学習で期待する支援などは、説明を懇切丁寧に行う必要性が示された。また、レベルが高すぎるから落ちこぼれになるという意見もあれば、逆にスカイプの様子を見たがレベルが低く驚いたという意見もあり、多様化する家庭の要望や児童の学力差への対応が求められていることが確認できた。

#### （５）まとめ：国内外へのインパクトと今後の展望

新学習指導要領のねらいは言うまでもなく日本人の英語力の向上である。これまで「6 年間の英語教育」と言われてきたが、今後は「10 年間の英語教育」となり、その 2/5 を小学校英語が担うことを考えればその責務は大きい。

本研究は 2006 年から世界で使われているケンブリッジ児童英検を取り入れ 4 技能教育を開始した所に端を発している。教科で 4 技能指導をすることは英語嫌いを生むと言われる中で、本協力校と外国語活動の学校とを比較してきたが、動機づけはともすれば外国語活動の学校よりも高く、また英語力も高かった。ここから多角的かつ有機的に取り組んできた協力校の英語プログラムは学力向上と動機づけ向上に有効であると言えるだろう。

今回の科研の国内外へのインパクトであるが、2009 年度から CEFR を軸にして実践的研究を継続し、データを蓄積し検証し続けてきたことと言えるだろう。長期にわたる多角的研究こそが、国際社会で通用する小学校英語の在り方を模索する現代社会に必要なだと考える。2020 年から施行される新学習指導要領の実施にあたり、本研究で得られた結果は日本における英語教育を考える上で多くの示唆に富んでいる。

以上本研究の結果を踏まえ、我々が考える今後の小学校英語のあるべき方向性を示し、本研究のまとめとする。

授業時間は最低週 2 時間、英語専科と ALT のチームティーチング、家庭と連携して課題を出し、学校・児童・家庭が一体となって取り組む英語教育プログラムを構築する。

スカイプや対面などの国際交流を継続的にカリキュラムに取り入れ、学んだことを実際に使う場面を与えることで、学力向上につ

なだった。このように日々の英語学習（他教科と横断的指導を含む）と国際交流を有機的に繋げる。

日々の取り組みを客観的に捉え常に評価し、確認することにより教育改善と学力向上につなげていく。

今後も本研究で得られたデータを用いてさらなる分析を積み重ね、得られた知見を共有する。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

米田 佐紀子、西村 洋一、動機づけを維持して『英語嫌い』にさせない指導とその要因 公立小中での経年調査から、英語教育、大修館書店、2017 年 10 月号、pp.12-13

米田佐紀子、豪児童とのスカイプ交流における日本人児童の英語会話力、外国語教育フォーラム 金沢大学外国語教育論集、第 11 号、金沢大学国際基幹教育院外国語教育系、2017 年、pp.49-64、査読無し、<http://hdl.handle.net/2297/47150>

〔学会発表〕(計 5 件)

米田 佐紀子、西村 洋一、日本人児童のスピーキングにおけるやり取り能力に関する探索的検討 オーストラリア人児童とのスカイプ交流実践から、第 48 回中部地区英語教育学会 静岡大会、2018 年

宮浦 国江、リーディング再考---アメリカ小学校リーディング教材 小学校国語教科書との比較を通して、全国英語教育学会全国大会 第 43 回島根研究大会、2017 年

米田 佐紀子、西村 洋一、公立学校における学力と情意に関する経年調査：小学校 5 年生から中学校 3 年生までの追跡調査から、第 47 回中部地区英語教育学会 長野大会、2017 年

米田 佐紀子、西村 洋一、英語力と動機づけについての経年調査から見た「教科としての英語」と「外国語活動」の成果と課題、全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会、2016 年

米田 佐紀子、西村 洋一、教科としての小学校英語の成果と課題 CEFR に準拠したケンブリッジ英検を用いて、大学英語教育学会 SIG on CEFR 第 1 回研究会、2016 年

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

米田 佐紀子 (YONEDA, Sakiko)

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：70208768

(2)研究分担者

西村 洋一 (NISHIMURA, Yoichi)

北陸学院大学・人間総合学部・教授

研究者番号：70406809

宮浦 国江 (MIYAURA, Kunie)

北陸学院大学・人間総合学部・教授

研究者番号：50275111